

一九八〇年——年頭の感

周 郷 博

「八〇年代の選択」ということばが、七九年秋の衆院議員選挙にあたって、与野党ともに、日本の政治の進路を決める重要な「争点」として「政治の次元」で、「大いに争われた」けれど、それは、なんととっても、政治——というよりも、直接には、「選挙」つまりは総選挙という時点で有権者の票がどれだけそれぞれその党に集まるか、ということだ。「喧しく」熱っぽく候補者たちが口にしたことばだったろう。

三十年にわたる「一党独裁」に似たかたちの自民党、それに社会、民社、公明……民主連合などまで、それぞれに日本の進路に未来について何らかの青写真を描いて「争われた」わけだけれども、日本の政治——そして経済、日々の暮し、「生活」は、何を軸(軸)にして、どういう方向へ向かって「進路をとる」「新しい太い芽」主枝を伸べていこう」としているのだろうか？
いま、その一九八〇年という年になって、その「八〇

年代」が始まる年の「年頭」にめぐり合せて私たちは立っている。

「八〇年代の選択」ということばを、たんに「政治の次元の用語以上」のずっしりした重みをもったものと感じてきている者にとつて、この新しい「年の始め」（——なんと忘れていた「なつかしい」ことばを私は思いだしたのか！）は、何か過ぎ去っていく過去と新しく来るものとの境目に立つ、回心、覚醒……老若男女を問わずに「日常的なものを超えた」感慨を深くもっていいはず——だと思ふけれど、そんな心（感じる心）さえ、何やらひどく「衰え」を見せている感じがする。

私はここで、昔の年の暮れ（大晦日）から正月へ（新年へ）の何かうきうきする（やがて新しい春がくる）時の流れを思い出しているのだが、新しい年を迎えるのに、身の回りのもの（環境）をできるだけ不潔不淨なものに掃除したり拭き清めたりして、やがて百いくつかの「煩惱」——欲心の「穢れ」を洗い清める除夜の鐘を聞いて、その新しい年を迎えた。

ところが、戦後——とくに六〇年代から七〇年にかけて、「経済大国」を謳歌したその絶頂期の、この「年の

暮れ」はデパートやバー、飲み屋が「教会にとつて代つた」ような「妙なクリスマス」が大はやりの時代があつて、昔の「新年」のほうは、その「欲望、物質謳歌」の妙なクリスマスの大はやりで、影がうすくなつていた。

その六九年の春に大学附属の幼稚園の園長になつた私は、その年の暮れに近いあの幼稚園での「クリスマスのお祝い」と称するものに大まじめで腹を立てたことがあつた。それは今から十年もまえのことだが、当時、その幼稚園の「クリスマス」で、一人ひとりの幼稚園児に、その当時の値段で千五百円近い（今なら、四千円にもなる）「クリスマスのおくりもの（ギフト）」を与えていた。「園長先生、子どもがよるこんでいるから見て……」と関先生（いまは幼稚園をやめて幸福な家庭の母・主婦になつている）が私を誘うのを「見たくない！ こんなクリスマスをややるべきではない！」とアタマから叱つた（憤つた）ことがある。（そのことで関先生とは心の深いところで親しみができていたように思い出される）。

この一つの事件のあとで私は、こんな、世界のどこにもない「甘え、不淨なクリスマス」よりも——クリスマスなら、もつと救い主の誕生を祝う（いまの子どもたち

にとつてその「救い」がほんとうに必要なのだ。「闇の中に光を」共に感じる、清浄なクリスマスにした。——「年の始め」（「年の始めのためしとして……」とその昔にうたわれた）——「新年のお祝い」をやるほうが、子どもたちにも家庭の父母たちにも意味があるのではないかと「ひとり考えていた」時期があった。日本の日常生活は、その昔の面影をとどめないほどにすっかり変わってしまったといえる——この大変化のなかで、「年の暮れ」から「新年」にかけてのなん日かのあいだに、「孤島のよう」に、日本人の「心」がなおそこに素樸に生き残っている……そんなふうに私には思われたのだった。

過ぎ去っていく過去と新しく来るものとの境目に立つ——昔の「年の始め」や夜のあとに来る「朝」——そういう「生れなおす——新生の目ざめ」のようなものを、私たちはどれだけ実感（「生きること」の実感）をもつて感じているだろうか。

何を書くともなく「一九八〇年——年頭の感」という題目を書いて考えているうちに、どういうわけか、その「年頭の感」が、藤村操の「巖頭の感」というのと、いつのまにか二つが「裏と表がかすんで一つに重なって」

感じられてきた。明治三十七年——藤村操という、当時の一高（旧制第一高等学校）の一年生三学期の学生（少年）が、その年の五月二十二日に華嚴の滝に投身自殺した。（当時の旧制高校は、いまの欧米、中国のように新学年が秋に始まり、五月二十二日は三学期が始まって少したったところだった）藤村操が一高の秀才であったこと、「巖頭の感」は天下の名文であること……この藤村操の自殺という事件は、ずっと後の私たちの少年時代にまで、なんでもない農家のおばさんまでが何かにつけて話題にした。それほどに長きにわたって日本人の記憶に残った事件だった。全文はこうである。

悠々たる哉天壤、遑々たる哉古今、五尺の小軀を以て此大をはからむとす、ホレイシヨの哲学竟に何等のオーソリティーを備するものぞ、万有の真相は唯だ一言にして悉す、曰く「不可解」我この恨を懐いて煩恥終に死を決するに至る、既に巖頭に立つに及んで胸中何等の不安あるなし、始めて知る、大なる悲観は大なる楽観に一致するを。

「悠々たる哉天壤、遡々たる哉古今（「遡々たる哉古今」と憶えてる人も多い）、五尺の小軀を以て此大をはからむとす……」につづいて「ホレーン」の哲学……」というところは今もよくその意味が分明でないが、けっきょく、万有の真相は唯だ一言にして悉す曰く「不可解」——いってみれば、時代とその状況は現在とは大きく距っているけれども、「人生不可解」という一言に尽きる、ということが、この「巖頭の感」の「巖頭に立つ」に至る筋道として独特な「名文」で少年藤村操は語っているように私には感じとれる。

明治三十七年は、西暦でいえば一九〇四年、日露戦争が起る年で、今世紀——二十世紀という一つの時代が始まる「大きな転換の時代」だった。それから七十五年ほどたったこの一九八〇年の年——これは明らかに一つの時代が終って、未だ見ざる「新しい時代」にいやでも応でも立ち向うことになる、そんな新しい歴史の岐水路（かどく）に門口に私たちは立っている。このことは歴史学者トインビーやバラクラフがとうに「予見」していた「人類史の大きな転換」であった。

「悠々たる哉天壤（広大な宇宙とこの天地）、遡々たる

哉古今（人間が生きてきたこの歴史という時の流れ）——その中で「五尺の小軀をもつた“人間”という生きものが何によってその存在を証しするのか……」この「少年らしい」藤村操の弾んだ「やわらかな心」の渦巻くような世界像——人生像に、明治という時代の「若さ」がなお緑色濃く脈動しているのを感じさせる。宇宙や生命の謎、先史研究や人類学は、それから後の七十年に及ぶ間に、藤村操の時代とは較べようもなく「進んで」いるはずだけれども、多くの人々にとって、それらはたんに受け身の「知識」や「情報」というところに止っていで、「生きている一人の人間」のからだで「感性」によってその全体がつかまれている——「人間いかに生きるか？」というところで「受けとめて」いる感じは薄い。

この「人生不可解」という大きな問題が八〇年代の年頭に立つ私たちに、再び大きな問題として臨んできているのだ、と私は思う。

けれど、この大きな問題はどうもまじめに問題にされそうもないのだ。つかまえようもない「不安（先行き不安）」のかたちで、いまの親たちにも、若者にも、子どもたちにもますます「つき纏って」いる——「ト、ト」と

か「開運」とかいう運命判断という商売がかげで大繁盛だということも聞く——進学塾の繁盛ぶりも想像以上——どうやら「誰か」「何か」に「すがって」この「人生不可解」という避けようもない問題を個人本位に慰める「解決する」手をさがしている風潮が大勢のようで、「大なる悲観は大なる樂觀に一致するを」ということばに暗示されている——この時代の「危機意識」を深くくぐりぬけて、「一つの新しい心境」に到達するという気力にはまったく欠けているように感じられる。「不安」を慰める手段には事欠かない「豊かな社会」だし、そういう「不安」を慰める商売はすぐにできてくる。

私が一九八〇年——年頭の感というこの短い文章を「年の始め」を思い出し、夜の闇のあとの「朝の感覚」の再生とともに、七十年まえの藤村操の「巖頭の感」とかさね合せて書いてきた気持がわかってもらえるかどうか。

ついでに書き添えておきたいが、その藤村操と同級だった一人の同級生が、終戦前後（昭和一五—二一年）の一高の校長をした安部能成という人で、そのころの一高の卒業生が校長の安部能成に揮毫をせがんだ話も『向

陵』という同窓会雑誌に出ている、書いてもらった揮毫の一つに、

山静似太古（山静かにして太古に似たり）

日長如少年（日長くして少年の如し）

という漢詩句があつて、私は「ああ、なんといいいことば」にめぐり合ったものか」と藤村操の「巖頭の感」と通じるものもちながら、鷹揚な「そこから何かが生れ出てくる」ゆたかな自然像、人間（少年）像が浮かんできた。この「日長如少年」——現在の「教育」（学校が不当に専有している）がなんと惨めで不毛なものかを思い知らされる思いがした。

一九八〇年——政治ばかりではない、時代が大きな転換に向うとき、「教育」——というよりも、むしろ「人間の問題」が、「政治」に優先する大きな問題になってくるのは世界の「常識」であり、政治もそうだが、「教育」——「人間の問題」は、現在の状態を「そのまま延長した」その線の上には、もう「未来はない」ことを、誰ひとり疑うものはいないだろう。

私が言おうとしたこと、それは「人生いかに生きるか」が、これからの教育の中でその核心に据えられなけ

ればならない、ということだ、といつてもよい。よく考えて見るがいい。「教育は永遠につづく努力であり、悪魔との不断の闘争だ。そこに教育者の面白味もあるのだらう」という、遠軽の家庭学校を訪れた私の一高の後輩の一人のことばが、私には嬉しい、「教育論議」「制度いびり」よりもずっと実感のあることばだったし、教育というものの実体―本体は、いま徒らに騒がれているようなものである代りに、これからは（すでにそうした動きの中にいる）「人間の「救い」」（たんなる知識、地位獲得の競走や個人的成功のためではない）という側面が新たに大きくなっていくだらう―その側面をこれから本気にそだてていくべきだ、というのが最近の私の回心―発心でもあった。

と同時に、女性―母の問題が、教育の中で大きな問題になるだらう―「女性問題」はヨーロッパ、アメリカでも、ますます「大きな問題」になってきているが、「聖母子像」というものに暗示されている「女性Ⅱ母」のからだ（と心）の清浄（大地、自然の清浄と通じる）―このことを抜きにして「教育が教育でありえよう」

はずはないことも、私は、これもこの夏のヨーロッパの旅の中でよくよく考えた。日本の女の顔―母の顔はその生活とともに余りに変り過ぎた。ヨーロッパ、アメリカ、中国にも、「朝」がまだあった（日本は夜―欲望の渦巻く経済大国か）し、「友情」も「人生の悲しみ」も、「求めるもの」をもった顔と私はいっしょに語る「救い」に、まだめぐり合うことができた。

私は、ひどく回り道をしたが、ら、「教育のこと」をこの八〇年代の年頭にあたって語ってきたつもりである。三歳の子どもが二十三歳という若者になるとき―それは、もう未知な二十一世紀の始めだからである。

